たのだ．だんだんと黒澤さんの足は本郷から遠退いていった．私がお目にかかった最後は，リハビリのために通っていたプールからの帰りだった．2005年のことだったように思う．

大先輩・黒澤幸子さんのこと（中馬千鶴）

Chidzu CHUMA: Cherishing the Memory of My Big Senior Sachiko Kurosawa

516-[redacted] 三重県伊勢市[redacted]
[redacted] Ise, 516-[redacted] JAPAN

私は東邦大学理学部2年次から，薬学部生薬学教室の久内清孝教授や幾瀬マサ助教授に許可を得て，教室の雑用をお手伝いすることになりました．夕方の5時になると，お決まりのティータイムでした．そこでは，当教室先生をはじめ，その日の来訪者などが一堂になり，にぎやかに色々なことが話題になりました．特に，久内先生が東京大学の原寛教授のもとを訪れた週末の翌週は，「原君がね・・・，クロちゃんがね・・・」と話は尽きませんでした．

クロちゃんとは，帝国女子理学専門学校卒業（東邦大学理学部の前身）の黒澤幸子さんのことでした．あるとき，朝日新聞一面に彼女の顔写真が出ました．東京大学植物学教室から，日本で初めて第二次ヒマラヤ地方植物調査隊に女性が加わるというのでたいへんなニュースになったのです．その時から，ぜひ一度黒澤さんにお会いしたいという思いは募り，機会があれば東京大学へご一緒させてほしいと幾瀬先生に頼み込みました．ある時，教授室に呼ばれ，幾瀬先生から東大の原先生・黒澤さんのもとへ植物を届けたいので植木鉢を持って行くようにと言われました．いよいよお二人にお会いできるのだと思うと，わくわくして胸が高鳴り夜も眠れないくらい興奮しました．ついにその日が到来し，ヒメザゼンソウの鉢を持ち，幾瀬先生の後について赤門をくぐり，植物学教室に入りました．幾瀬先生から原先生と黒澤さんに紹介して頂いた後，原先生は黒澤さんについて「黒いからクロちゃんと呼ばれてるんだよ」と，ちょっと笑いながらおっしゃいました．黒澤さんは肩まで垂らした，茶色がかった髪と白くない肌，鼻は高く，ガッチリした体格で，インド人と紹介されても違和感のない風貌でした．彼女は一言も喋らず，下を向いて仕事をされていました．

東邦大学を卒業後，東大植物学教室の研究生にしていただき原先生・黒澤さんとの毎日が始まりました．お二人について幾瀬先生から細々と注意を受けていましたが，心配は無用でした．黒澤さんからは，「私に敬語は使わないで！」というのが第一声でした．帰宅するときは翌日用に，やかんに一杯の水を汲み置きしておくことを教わりました．

その後，第三次ヒマラヤ調査隊がスタートし，生植物が現地から届くようになるとそれを持って2人で中軽井沢にある佐藤邦雄さん宅の庭に移植しました．彼女は，木の下へ植える植物への日光や雨のかかり具合いを見極め，植木鉢にいれたヒマラヤ植物にラベルを付けて，鉢を地面に埋めていくのでした．私はひたすら植木鉢の穴を大きな軽石で塞ぎ，さらに軽石で出来た土を詰めて，手渡した．根は空気を好み，乾燥しない程度に通気性を良くするのが第一と教えて下さった．当地は，浅間山の噴火で出来た軽石の土で出来ているのでどこを掘っても軽石の小玉は手に入った．ついに佐藤さん宅の庭はヒマラヤ植物で埋まりました．

夏休みになると，原先生の別荘に泊まりました．食事は黒澤さんと私が作りました．そこで大変なことが起こりました．料理はなにであったか忘れましたが，野菜の切り方でくい違いが生じ，二人とも大声で泣き出したのでした．原先生は非常に困られ，口をへの字に噤み，じっとされていました．それ以来，ぐっと彼女との距離が縮まり，自然体でお付き合いしていただけるようになりました．黒澤さんは買い物が苦手だということがわかりました．店の前まで来るとあれは良いけど，こちらは格好が良くないなどとおっしゃるのを聞い

たうえで，私は店員に声をかけ，買い求めるのでした．昼間は植物採集や買い物などを楽しみました．夕食後は，私は標本の整理などをし，原先生は持ってきた研究用のカードを取り出し，黒澤さんと話し合っては新しい知見を加えられました．数年後には，これらの内容が研究論文として発表されることになるのでした．論文の図解はほとんどが黒澤さんによるものでした．

あるとき原先生が彼女の結婚話について語ってくれました．植物学教室の方々は，誰が帰り道に声をかけお茶に誘うことができるのか，賭けをしていたが誰一人成功しなかったのだと．真面目に正面から申し込まれた方が居られました．しかし彼女は勤めてから病気で入院した経歴があり，悩んだ挙句，再発してご迷惑をかけるといけないからと丁重にお断りしたとの事でした．黒澤さんもご一緒のときでしたが，否定されませんでした．

料理については，銀座・明治屋の中華料理教室に通われたが“洗い物ばかりしていた”と笑って話されてました．ときどき，大変美味しいが飲み込むのが困難なくらい辛いチキンカレーを作ってくれました．幸いにも私は辛いのは大好きでしたが，辛いのが苦手な方は，「ホワイトライスがおいしい！」とさかんに褒めていたのを思い出します．またある時は，長野の名物蜂の子の缶詰を使った混ぜご飯でした．味付きなので炊き立てご飯に混ぜると出来上がり．幼虫から羽の生えた成虫までいろいろな成長段階の蜂がはいっていました．初めてであったが，おいしくいただけました．研究室に来られた方々に出されるのを傍で見ていると，悲鳴を上げそうな方もいておもしろかった．久内先生は，召し上がりながら蜂の子取りの様子を話して下さった．

ある時彼女は，「私は動物が好きだったから，将来植物の仕事をするとは全く考えていなかった」と言われました．幼少時代から，お父様とご親交のあった福井玉夫先生 (東京文理大学・動物学) について野外観察を続けられていたそうです．就職をお世話なさったのも福井先生だそうでした．就職先の東京大学では，植物学教室の原先生にお会いし，先生から植物の絵を描くことを出題されたと就職のいきさつを話してくれた．

時には，原先生と黒澤さんは赤門前から都電に乗って銀座に案内してくれました．黒澤さんはとてもおしゃれな方で，ナイロンの透明なストッキングが売り出されたとき，真っ先に買ったが，そのときの値段は一足が一ヶ月のお給料分を上回ったという．多分，銀座高島屋の輸入品部の上お得意さんだったと思われます．フランス製のスプリングコートやイタリー製のワイシャツ，スエットセーターなどを身につけていました．そのコートは後にいただき，いまも愛用しています．

伊勢へは，二見が浦の修学旅行以来だといわれ，外宮，内宮を案内しました．後で，「中宮には案内してくれなかった．最も観察に良い所は隠しているのだろうか.」と原先生に報告されたようで後々まで語り草になりました．その後，何度も原先生と共に伊勢に来られました．旅行をされると，彼女は食事後に割り箸の袋に日付けをいれ，皆にサインを求めました．また，採集の途中で神社・仏閣が眼に入ると，お二人は必ず頭を下げ，お参りをされました．黒澤さんはお守りもよく買い求められました．その袋の中には，いざという時のために，小さく折りたたまれたお金をいれていました．私も伊勢神宮のお守りには，伊勢までの交通費を入れてお渡ししました．

研究については，植物の染色体を調べる能力は，正に職人わざというか，神の手を持ったお医者さんが時々テレビにでているが，それに匹敵するほどの腕前で，原先生と組んで次々と日本とヒマラヤの植物関係を明らかにされ，偉大な業績を成し遂げられました．

第三次ブータン・ヒマラヤ植物調査隊の成果は日本橋・高島屋で特別展示された．その時，ヒマラヤのシャクナゲをみごとに造花で再現され，精巧に作られた花は参加された隊員の方々をも驚かせました．私が研究生を終えるとき，高島屋の特別展へ昭和天皇をご案内された時のスーツ（この日のために緋牡丹色のインドシルクで新調された）をいただきました．

その後，東北大学で博士号を得られたことを知り，お祝いを申し上げると，猛烈な勢いで怒られました．シャイな彼女は隠しておきたかったのでしょう．どのような研究内容であるのか，ついに教えてもらう事は出来ませんでした．

近年は互いに病人を抱え，疎遠になっていました．植物研究家はふつう九十才までは元気であろうと勝手に思い込んでいましたが，黒澤さんの訃報を知り，残念です．第二次世界大戦を乗り越え，昭和の時代を生き抜かれた方がまたお一人鬼籍に入られました．ご冥福をお祈り申し上げます．